

対人関係としてのライバルに関する研究：児童期後期を対象として

宮原, 里依子
九州大学大学院人間環境学府

吉良, 安之
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/875>

出版情報：九州大学心理学研究. 3, pp.137-143, 2002-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

対人関係としてのライバルに関する研究

— 児童期後期を対象として —

宮原里依子 九州大学大学院人間環境学府
吉良 安之 九州大学大学院人間環境学府

The study of rivals as an interpersonal relationship — The case of the latter stage of childhood children —

Rieko Miyahara (*Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University*)
Yasuyuki Kira (*Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The purpose of this study was to investigate the relation between the feelings against rivals and the competence in the latter stage of childhood children. The two surveys were administered. The first research was the factor analysis of "survey of rivals scale" with 117 6th graders of elementary school. Four factors were sampled: hatred, encouragement, fellowship, and competition. The second research was carried out relating to the difference of feelings against their rivals depending on the level of competence with the same children as the first research. The results were as follows: 1. high competence children considered their rivals more friendly than low competence children. 2. 6th graders had strong competitive feelings against their rivals regardless of the level of competence. 3. 6th graders had multiple feelings against their rivals.

Keywords: rival, competence, childhood

問題と目的

日常生活の中で、我々はしばしば「ライバル」という言葉を様々な場面で用いている。しかし一口にライバルと言ってもその意味はいは個々人によってそれぞれであることが考えられる。

競争についての研究は、今までもいくつかなされてきている（例えばSherif, 1966; Johnson&Ahlgren, 1976）。しかし、「ライバル」という言葉で表される対人関係としての研究はほとんどなされていないのが現状である。その先駆けともなる研究として室山（1995）は、大学生を対象に面接調査を行い、「ライバル」という言葉で表される対人関係から思い浮かぶイメージを出してもらい、その定義化を試みた。室山によると、ライバルとは、「課題を媒介として競争する相手で、実力が同程度であり、競争によってお互いに良い影響を及ぼしあう相手」である。室山はその研究の中でライバルと見なす相手との関係についてインタビューを行い、そこからライバルに対する感情、評価、関係についての表現を抽出した。そしてそれらの表現を項目として分け、それに基づきライバルとの関係をカテゴリー化した。それによると大学生が捉えているライバルは4つのカテゴリー、課題中心関係、敵対関係、仲間関係、親友関係に分けられた。そしてその結果、ライバルとは敵対関係であると回答した被験者はほとんどいなかった。つまり、大学生においてはライバルは競争相手ではあるが、必ずしもネガティブな関係を

意味しているわけではなく、親友あるいは友人として好意的に認知、評価されている関係でもあるということである。言い換えれば大学生においてはほとんどの場合、ライバルはポジティブなものとして捉えられているということである。しかし、これは室山（1995）自身も指摘するように青年期の年齢層、特に大学生においてのみの結果であるため、上記のライバルの定義が必ずしも他の年齢層にあてはまるとは限らない。

そこで宮原（1999）では、室山（1995）のライバルの定義を基に、ライバルを持つためには①ある人物をライバルとして認識するためには自己と他者を対等な位置に客観的に置いて見られるということと、②ライバルとみなす相手と互角にわたりあうという自信、即ち自尊心のある程度の高さが必要なのではないかと考え、「自尊心の高い者は低いものよりもよりライバルを意識しやすい。」という仮説を設け、小学校高学年（4年生及び6年生）187名を対象に質問紙調査でライバルの有無および自尊心の高低を測り、 χ^2 検定によりライバルがいる者といない者との間に自尊心の得点の差があるかどうかを検定した。その結果、6年生ではライバルがいる者といない者との間に自尊心の差は認められなかったものの、4年生ではライバルがいる児童は自尊心が高いという有意傾向、さらに4年生と6年生を合わせた場合はライバルがいる児童はライバルがいない児童よりも自尊心が有意に高いという結果を得た。これらの結果から、自尊心が高い児童は低い児童に比べ、ある人物をライバルとして認

識することが多いということが分かった。つまり、自尊心の高低とライバルの認識には関係があることが示唆されたと言えよう。

ところで、自尊心については様々な考え方、定義があり、自尊心を測る尺度も数多く作られている。伊藤(1994)は、自尊心という概念の再検討としてこれまでの自尊心研究を概観しているが、やはり自尊心の全体的な構造は明らかになっていない、とした上で、自尊心は、「自己についての全般的な感情、評価、ないし態度」と定義している。この定義からも自尊心の捉え方の広さがうかがえる。自尊心の中に含まれるものの一つとして「コンピテンス」(自己効力感)というものがあるが、コンピテンスとは、「人間がその環境と効果的に相互作用する能力」(White, 1959)と定義されている。換言すれば、「達成すべき要求に対し、満足な成果をあげられる能力」(Coopersmith, 1967)である。つまり、「自分はこれくらいできる」といった有能感のことである。

藤崎ら(1992)は、「児童は日常生活経験を通して自分のできることとできないことを徐々に自覚することによってコンピテンスを多様な領域にわたって形成していく。そしてその総体として自尊心が形成される」としている。また、Coopersmith(1967)も、「コンピテンスの達成とは、実行すべきことをハイレベルで達成することであり、そのレベルと達成すべきことがらは年齢によって異なる」としている。すなわち、はじめは自分の生活に関係の深い領域からコンピテンスを形成してゆき、それは加齢とともに経験が増えることによって領域が広がってゆき、最終的には伊藤(1994)の定義したような全般的な自尊心へとつながっていく、ということになる。実際に、藤崎ら(1992)は児童期後期から成人までを年齢別に5群に分けそれぞれの年齢層におけるコンピテンスの構造と内容の年齢変化を検討している。その際に用いられたコンピテンスの下位尺度は加齢と共に領域が増えており(小学生では4領域、成人では12領域)、成人での具体的な項目を見てみると「自分の容姿に満足」、「自分は価値のある人間だ」、「自分に満足している」、「人のために役立っている」など、多くの自尊心尺度にも見られる項目が入っている。

以上をまとめると、コンピテンスの領域(例えば勉強の領域、容姿の領域など)が年齢と共に徐々に増加していき、最終的にはそれらの様々なコンピテンス領域の集まりが自尊心を形作っていく、ということになると考えられる。したがってこの考え方に基づくと、児童期後期においてはまだ全般的な自尊心が十分に形成されているとは言えないということになる。これはDamon(1990)の「児童の自尊心の中心となる次元は有能感(コンピテンス)、個人の力、コントロール感覚である」という記述とも一致している。さらに、「児童の対人関係の研究の多

くが、生活の場から切り離された児童の発達を取り上げるのではなく、学校という社会的環境の中で発達を続けている児童に焦点が当たっている」(首藤, 1998)のも、児童がその生活の大部分を学校で過ごすことを考えれば納得のいくものであると言えよう。これらのことから、児童期後期における自尊心を捉える場合、上に述べた全般的な評価として捉えるよりは、児童の生活に即した具体的な事象に焦点を当てて測っていく方がより妥当なのではないか、と考える。

一方、「対人認識」の発達の側面に注目してみると、人は児童期の半ばを過ぎるあたりから自他の内面性や精神性、人格特性に関心を向け始める。そして自己と他者がある程度客観的に捉えられるようになり、他者との比較を始めると言われており(梶田, 1988)、他者との比較の中で自己を相対的に位置づけてとらえるようにもなってくる。Phillips(1963)によれば、性格や学力などについて自己評価、教師評価、友人評価を行って相互の相関を求めたところ、3年生では自己評価と教師の評価、および自己評価と友人の評価の両方とも無相関であるが、6年生ではどちらの場合においても有意な正相関をもつようになるという(柏木, 1983)。さらにこのような自他認識の深まりと共に、複雑な感情(うれしいけど少し悲しい、など)やアンビバレントな感情も理解でき、感じられるようになってくるのが小学校の中ごろ以降になってくるとされている(岩田, 1995)。したがって本研究では、上記のようなやや複雑な感情も感じ、それを表出することができるようになってくる年齢以上の者が感じるライバル意識を対象とし、特に児童期後期に焦点を当てていくものとする。

また宮原(1999)では、児童期後期において自尊心の高低とライバルの有無に関係を見いだせたものの、ライバルの有無を聞くにとどまり、自己をある程度客観的に見ることができるようになりはじめる小学校高学年の児童が実際にライバルと認識している相手に対しどのような感情を抱いているかということは明らかにすることができなかった。したがって小学校高学年の児童がライバルにどのような感情を抱いているかということを調査していく。

以上のことから、本研究では児童期後期に焦点を当て、児童期後期においてまずライバルに対する感情がどのようなものであるかを明らかにし、その後ライバルに対する感情はコンピテンスの高低によってどのような違いが見られるのか、また、児童期後期におけるライバルに対する感情にどのような特徴が見られるか、ということを探索的に見ていくことを目的とする。

方 法

被験者 市立小学校6年生117名(男63名, 女54名)
質問紙

①ライバル調査質問紙(筆者が作成, 30項目, 5件法)

項目選定のため, 大学生及び大学院生に対し, ライバルに対しどのような感情を抱くかということ的自由記述で回答してもらい, それを30項目に絞り5件法の質問紙を作成した。質問文の内容については筆者及び指導教官との協議の上で決定した。質問文の前に, 以下のような教示を書いた。

「日ごろみなさんはあの人は私のライバルだ, と思うことがあります。そこで今日は, ライバルについてのアンケートに答えていただきたいと思います。まず今, 自分にライバルがいるかどうかを考えてください。上の質問でいる, と答えた人は答える時にその人のことを思い浮かべながら下の質問に答えてください。いない, と答えた人はもし今ライバルがいたらその人に対して自分はどんな気持ちになるだろうかと考えながら答えてください」

②「認知されたコンピテンス測定尺度」(児童用)(桜井(1983)による。28項目4件法)

この尺度は「学習に対するもの」, 「友人関係に対するもの」, 「スポーツに対するもの」, 「全般的な自分の生き方に対するもの」の4つの下位尺度から構成されている。

手 続 き

調査は1コマ(45分)の授業時間の中で行われ, 上記の二つの質問紙についてそれぞれのクラス担任の教示のもとで実施された。あらかじめ担任から「近くの人としゃべったりせず, 自分一人で静かに回答するように。」という教示を与えてもらった。また, 回答の速さを合わせるために, ①, ②の両質問紙とも担任が質問文を一文づつ読み上げながら進めてもらった。

結 果

ライバル調査質問紙(30項目)の因子分析を行った。主成分分析法により4因子を抽出した。バリマックス回転後の因子負荷量をTable 1に示す。まずF1は, 「嫌い」, 「むかつく」, 「じゃま」などの, ライバルに対しての否定的感情を表す内容であることから, 「嫌悪感」因子と命名した。F2は, 「がんばろうと思う」, 「目標にしたい」, 「尊敬している」などのライバルを自分よりも少し能力が上ではあるが, その人の存在によって自分もその人の持つ能力に近づいていこうという動機づけになってい

る, と解釈し, 「励み」因子と命名した。F3は, 「仲が良い」, 「気が合う」など, ライバルは仲の良い友人でもある, ということを表していると解釈し, 「親和性」因子と命名した。F4は, 「負けたくない」, 「自分と比べる」など, ライバルのことが好きか嫌いかという基準は入らず, 純粋に競争心を抱いているものと考え, 「競争心」因子と命名した。各項目群の α 係数は, 嫌悪感因子が.861, 励み因子が.801, 親和性因子が.862, 競争心因子が.635, 全体で.735を示し, 競争心因子が係数値がやや低いものの, 整合性が一応認められたと言えよう。

①コンピテンスと因子平均得点との関係

被験者をコンピテンスの得点により, 得点の高い上位30%を高群, 低い下位30%を低群として2群に分け, 解釈された4つの因子, 嫌悪感因子, 励み因子, 親和性因子, 競争心因子の, ライバル調査質問紙(5件法)での得点の平均を算出した(得点rangeは1.0~5.0)。被験者は高群35名, 低群35名, 計70名。コンピテンスと因子平均得点との関係をFigure 1に, 平均得点と標準偏差をTable 2に示す。

コンピテンスの高低の群間で, 4つの因子の平均得点に差があるかどうかをみるためにコンピテンスを被験者間変数, 各因子を被験者内変数として2要因分散分析を行った結果, 交互作用が有意であった($F(3, 204) = 10.333, p < .01$)。そこで, コンピテンス高群・低群でのそれぞれの因子得点の差を見るために, 因子平均得点の単純主効果を検定したところ, 嫌悪感因子の平均得点はコンピテンス低群が高群より有意に高く($F(1) = 8.901, p < .01$), 親和性因子の平均得点は低群より高群が有意に高く($F(1) = 6.481, p < .05$), 励み因子の平均得点は低群より高群が有意に高かった($F(1) = 17.925, p < .01$)。競争心因子では差は見られなかった。

コンピテンスの各群において, 各因子平均得点間に差があるかを調べるために, TukeyのHSD法による多重比較を行った結果, コンピテンス低群では励み因子の平均が競争心因子の平均よりも有意に小さかった($MSe = 0.25, 1\%$ 水準)。また同様にコンピテンス高群では嫌悪感因子の平均が他の3つの平均よりも有意に小さかった($MSe = 0.23, 1\%$ 水準)。

②コンピテンスと因子平均得点の総合点との関係

コンピテンスの高低によって, 4つの因子平均得点の総合点の平均に差があるかどうかを見るために, 一元配置分散分析を行った。ただし, 嫌悪感因子は逆転項目扱いとして計算した。その結果, 群の効果は有意であった($F(1) = 21.342, p < .01$)。コンピテンスと因子平均得点の平均と標準偏差をTable 3に示す。

Table 1 ライバルイメージの質問紙の因子分析結果 (N=117)

項目内容	F1	F2	F3	F4	共通性
21 その人なんていないほうが良いと思う。	0.773	-0.329	.	.	0.709
26 そのひとはむかつく。	0.753	-0.244	.	.	0.638
15 その人には失敗してほしいと思ってしまう。	0.752	.	-0.155	0.149	0.617
29 その人の存在をじゃまを感じる。	0.724	-0.299	-0.105	0.106	0.636
11 その人がきらいだ。	0.663	-0.260	-0.343	-0.148	0.647
4 その人とは足をひっぱりあってしまう。	0.509	.	.	0.121	0.275
23 その人のことを尊敬している。	-0.175	0.758	0.145	.	0.627
7 その人を目標にしたい。	.	0.698	.	.	0.490
13 その人の良いところをまねしたい。	-0.240	0.641	0.140	0.144	0.508
14 その人がいるとがんばろうと思う。	-0.242	0.598	0.178	0.361	0.578
30 その人がいるとはげみになる。	-0.338	0.474	0.372	0.299	0.566
10 その人がいるとやる気がおきる。	-0.313	0.444	.	0.389	0.447
19 その人に追いつきたい。	0.245	0.408	.	0.386	0.375
1 その人とは仲がよい。	-0.141	0.197	0.825	.	0.739
16 その人とはよくしゃべる。	-0.197	-0.212	0.812	.	0.744
2 その人とは気が合う。	.	0.234	0.788	.	0.686
24 その人とは話が合う。	-0.158	0.200	0.760	.	0.642
3 その人とは行動を共にすることが多い。	.	.	0.756	.	0.578
5 その人には負けたくない。	0.225	.	.	0.716	0.567
28 その人と同じ目標を持っている。	.	.	0.119	0.596	0.380
17 その人をいつも意識する。	0.258	0.330	.	0.566	0.496
25 その人に負けるとくやしい。	0.392	0.227	-0.108	0.556	0.526
6 その人と自分を比べる。	0.203	0.170	.	0.547	0.372
18 その人に勝つとうれしい。	0.362	0.278	.	0.499	0.467
8 その人と自分は似た所がある。	.	.	0.279	0.493	0.324
20 その人のことを課題場面で意識する。	-0.329	-0.175	-0.227	0.472	0.413
固有値	4.351	4.015	3.776	3.569	15.771
寄与率 (%)	14.504	13.384	12.586	11.898	52.372

F 1 嫌悪感 F 2 励み F 3 親和性 F 4 競争心

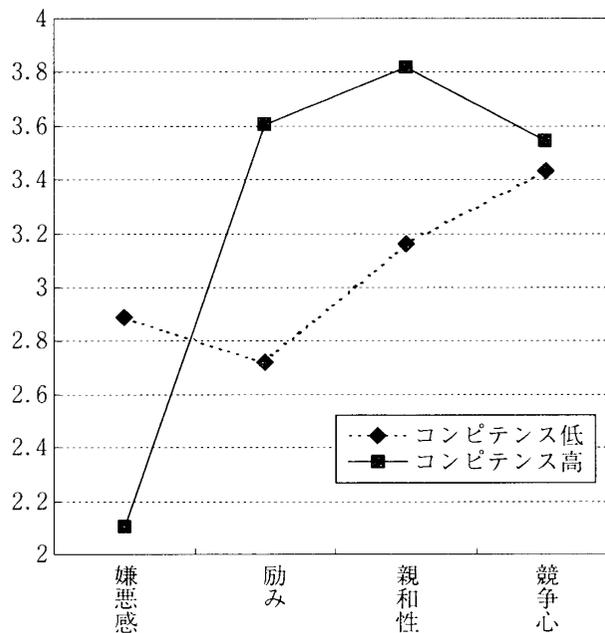


Figure 1 4因子の平均得点とコンピテンスの関係

Table 2 コンピテンスの高低と因子平均得点の平均と標準偏差

コンピテンス 因子平均得点	高 群				低 群			
	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
N	35	35	35	35	35	35	35	35
Mean	2.10	3.60	3.82	3.54	2.89	2.72	3.16	3.44
SD	1.09	0.89	1.19	0.65	1.12	0.86	0.96	0.77

Table 3 コンピテンスの高低と因子平均得点の総合点の平均と標準偏差

全項目		N	Mean	SD
コンピテンス	高群	35	2.22	0.56
	低群	35	1.62	0.51

考 察

1. ライバルに対する感情とコンピテンスとの関係について

結果として、コンピテンスの高い者は低い者よりもライバルのことを好意的に捉えている、と言うことができる。これは、①ライバルに対する嫌悪感（ライバルが嫌い、むかつく、など）がコンピテンスの高い児童よりも低い児童の方が高かったこと、②ライバルに対する親和性（ライバルとは仲が良い、友達である、など）がコンピテンスの低い児童よりも高い児童の方が高かったこと、③ライバルの存在を励みにする児童（やる気が起きる、追いつきたい、など）がコンピテンスの低い児童よりも高い児童の方が高かったこと、④4因子の総合得点（嫌悪感逆転項目として計算）の平均もコンピテンスの高い児童が低い児童に比べ有意に高かったこと、の4つの点から示される。つまり小学6年生の児童においては、コンピテンスが高い者はライバルの存在を肯定的に捉えており、逆に、コンピテンスの低い者はライバルの存在を否定的に捉えている、という特徴が認められた。特にコンピテンスが高い児童においては、ライバルに対する嫌悪感のみが他の3つの因子のよりも有意に低くなっている。コンピテンスの高い児童は「自分はこれだけできる」といったある程度の自信があると考えられる。その自信がライバルという自ら意識する競争相手に対しても気持ちの余裕をもたらす、その結果としてライバルのことも肯定的に捉えることができる、と解釈できるであろう。このことから、コンピテンスの高い児童はライバルを「敵」ではなく、「一緒にがんばっていく仲の良い人」として捉えているということが示唆される。そして逆に、コンピテンスが低い児童は自分に自信がないため、ライバルに対してあまり好意的な感情を抱く余裕がない、と考えられる。このことは、コンピテンスの高い児童

は競争心と励みの平均得点がほとんど同じであるのに対し、コンピテンスの低い児童は競争心よりも励みのほうが有意に低いという結果からもうなずけるものであろう。

競争心因子の平均得点について触れたが、もう一つ注目すべきことは、コンピテンスの高低にかかわらず、競争心（負けたくない、自分と比べる、いつも意識する、など）の平均得点はほとんど同じであったということである。つまり小学校6年生において競争心は自身の有能さを認められなくとも全般的にはほぼ同じように意識される、ということになる。コンピテンスの高い児童は、ライバルに対する励み、親和性、及び競争心がほぼ同じくらい意識されているのに対し、コンピテンスの低い児童では競争心が4つの因子の中で最も高く意識されている。このことから、コンピテンスの低い児童では、ライバルに対する主な感情は「競争心」であることが言えるであろう。

今回の結果において、競争心はコンピテンスの高い群も低い群も平均得点がほとんど同じであった。したがってコンピテンスの高い児童においては競争心が励み、親和性と共に同程度に意識されているのに対して、コンピテンスが低い児童は、競争心が相対的に高く意識されているということが言える。達成動機要因の一つとして競争的なものがあるという観点から競争心を捉えた堀野、森（1991）は、達成動機には大きく分けると「競争的なもの」と「自己充足的なもの」の二つがあり、大学生において競争的な達成動機が高い場合は落ち込みやすく、また、抑うつを形成する場合もある、ということを見いだしている。さらにその研究をもとに児童を被験者として行った研究においても同じことが言えるとしている（森・堀野、1997）。また、仲間に対する強い劣等感が子供の不適応感を生み出したり、自信や意欲を失わせたりすることにより、非社会的や反社会的な行動の原因になる場合もあるという報告もあるため（石田、1995）、競争心は強くともコンピテンスが低いというアンバランスな結果は気がかりな結果でもある。

2. 児童期後期に自覚される感情について

小学校6年生は学校での勉強、スポーツ、さらには塾といったようにとにかく「競争」を強いられる場面が多

い。言い換えれば、自分のコンピテンス（有能さ）あるいは「できなさ」をいつも感じているということになる。したがってコンピテンスが高い児童にはより有能感が自覚され、逆にコンピテンスが低い児童は自分の「できなさ」をいつも感じてしまうように思われる。この差が小学校6年生におけるライバルの捉え方の明確な違いを引きだしたとも考えられる。また石田（1995）は、「ありのままの自分自身を価値あるもの、好ましいものであると肯定的に見ることができるようになることは、自己意識の発達にとって重要なことである。自己を否定的にしか捉えられない場合には、自己を受容できず、不適応状態に陥ることになる。自分のありのままを価値あるものとして受け入れることができるかどうかは、自己の存在の意味付けばかりでなく、自己を取り巻く環境をどのように認識するか、それに積極的に適応していくことができるかどうかにも関わってくる。」としている。つまり今回のコンピテンスの高低によるライバルの捉え方の違いは、ライバルという対人関係に限らず対人関係全般、ひいては日常の様々な物事の捉え方にも通じるものなのかもしれない。「青年期に多くの対人的問題が起きる基盤は、児童期に蓄積されている可能性がある」（松尾ら、1998）という見解も示されているように、児童期、特に自己像をある程度捉えられようになる児童期後期に感じる自分の「有能感」あるいはその逆の「できなさ」は、その後の発達にも少なからず影響を与えていくものではないだろうか。しかし児童期後期の段階では教師や親などの周りの人間が生活に大きな影響を与えるために、ありのままの自分を受け止めるのは容易なことではないと思われる。しかしだからこそ、児童に影響を与える周りの人間の配慮が重要になってくると考えられる。

また、本研究においてももう一つ明らかになったことは小学6年生においても「感情の多重性」が見られたことである。小学校の中ごろ以降にかけて、児童は一つの事象に対して単一の感情というよりも、様々な感情を抱くことができるようになってきている（岩田、1995）。「ライバル」という対人関係は上述のように複雑な対人関係の一つとして捉えることができる。「あの子とは仲が良いけれど負けたくもない」または、「あの子は私にとって競争相手として意識する人だけど、仲が良い」といった単一ではない感情を小学6年生において持っているということが、競争心と親和性が同じくらい意識されているという本研究の結果から推察できると思われる。

3. 今後の課題

本研究の方法論の問題として以下のことを述べる必要がある。今回使用したライバル調査質問紙では、ライバルが今自分にいるかどうか考えてもらい、回答の際に現在ライバルがいる人は答える時にその人のことを思い浮

かべながら、現在ライバルはいない人はもし今ライバルがいたらその人に対して自分はどんな気持ちになるだろうかと考えながら答えてくださいという主旨の教示が用いられた。現在ライバルがいらない者は今の実生活において具体的な人物がいらないために過去のライバルを想起したり、あるいは自分の中にあるライバル像のイメージや、さらには人物への感情ではなくライバルという「言葉」についてのイメージを描いて回答した可能性も考えられる。つまり、本研究ではより具体的なライバルについての感情を引きだしてもらうという意図のもとにこのような教示が用いられたが、結果として回答は具体的な人物としてのライバルについての概念と、ライバルという言葉に対する概念を混在させてしまうものとなってしまったと考えられる。したがって当初本研究で意図していた「人物としてのライバルに対する気持ち」が教示によって不明瞭になってしまった、ということが言えよう。この点については質問紙における教示のより綿密な検討を予め行うべきであったと考えられる。よって、今後は一般的なライバルに対するイメージと具体的な自分の現在のライバルとを明確に分けた上でのさらなる検討が必要であると思われる。

4. まとめ

本研究では、児童期後期（小学6年生）におけるライバルに対する感情を明らかにするためにライバル調査質問紙を用いて探索的に検討し、その後、コンピテンスの高低によってライバルに対する感情の違いが見られるか、という点に注目し検討を行った。ライバルに対する感情は因子分析により「嫌悪感」、「励み」、「親和性」、「競争心」の4つに分けられた。さらにこの因子分析結果を元に、それぞれの因子の平均得点にコンピテンスの高低によって差があるか、また児童期におけるライバルに対する感情の特徴が見いだせるか、ということを検討した。その結果、①コンピテンスの低い者よりも高い者の方がライバルのことを好意的に捉えている、②コンピテンスの高低に関わらず、小学6年生においてライバルに対する競争心は高く意識されている、③小学6年生の発達段階においても感情の多重性が見られる、ということが示唆された。また今後の課題としては一般的なライバルに対するイメージと具体的な自分の現在のライバルとを明確に分けた上でのさらなる検討が必要であると思われる。

引用文献

- Coopersmith, S. (1967) *The Antecedents of Self-esteem* W.H. Freeman and Company
- Damon, W. (1983) *Social and Personality Development* (山本多喜司編訳 (1990) 社会性と人格の発達心理学

北大路書房)

- 藤崎真知代, 高田利武 (1992) 児童期から成人期にかけてのコンピテンスの発達的变化 —横断資料を通して— 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 **41** 313-327
- 堀野 緑, 森 和代 (1991) 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究 **39** 308-315
- 井上信子 (1986) 児童の自尊心と失敗課題の対処との関連 教育心理学研究 **34** 10-19
- 井上祥治 (1998) 自尊感情と自己概念の時間的安定性 岡山大学教育学部研究集録 **108** 101-105
- 伊藤忠弘 (1994) 自尊心概念及び自尊心尺度の再検討 東京大学教育学部紀要 **34** 207-215
- 岩田 純一ら編 (1995) ベーシック現代心理学3 児童の心理学 有斐閣
- 岩立京子, 岸 学, 高橋道子 (1994) 小学校における友人形成過程の分析 (3) 東京学芸大学紀要 1 部門 **45** 275-286
- Johnson, D.W. & Ahlgren, A. (1976) Relationship between student attitudes about cooperation and competition and attitudes toward schooling. *Journal of Educational Psychology*, **68** 92-102
- 梶田叡一 (1988) 自己意識の心理学 [第2版] 東京大学出版会
- 柏木恵子 (1983) 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- 松尾直博, 新井邦次郎 (1998) 児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係 教育心理学研究 **46** 21-30
- 宮原里依子 (1999) 児童期におけるライバル意識の形成に関する研究—自己意識の形成及び自尊心との関連について— (未発表)
- 森 和代, 堀野 緑 (1997) 絶望感に対するソーシャルサポートと達成動機の効果 心理学研究 **68** 197-202
- 室山晴美 (1995) “ライバル”として記述される対人関係に関する一考察 心理学研究 **65** 454-462
- Phillips, B.N. (1963) *Child Development* **34** 1041-1046
- 桜井茂男 (1983) 認知されたコンピテンス測定尺度 (日本語版) の作成 教育心理学研究 **31** 245-249
- Sherif, M. (1966) *Group conflict and co-operation: Their social Psychology*. London: Routledge & Kegan Paul
- 首藤敏元 (1998) 児童の対人関係と社会性の発達 教育心理学年報 **37** 55-65
- White, R. W. (1959) Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review* **66** 297-333